

社団法人 日本冷凍空調設備工業連合会 法人化40周年記念特集

機器メーカー

新晃工業

65年の歴史 培った技術力

二次側最前線を走る多彩な製品群

空調機器総合メーカー、新晃工業(社長 武田昇三氏、本社・大阪市北区南森町1-4-5)が先ごろ発表した平成28年3月期連結業績によると売上高は前期比5.8%増の414億6千200万円、営業利益同41.9%増の60億3千300万円、経常利益同38.3%増の64億1千100万円、純利益同60.9%増の41億9千900万円と営業利益・経常利益・純利益とも過去最高益を更新する良好な着地となった。セグメント別に見ても国内売上高は同11.7%増の340億7千900万円、営業利益同48.8%増の56億500万円となった。アジアは主として中国経済の成長鈍化が影響し、売上高、営業

利益とも前期比減少した。今期については売上高は前期比1.1%減の410億円、営業利益同8.8%減の55億円、経常利益同8.0%減の59億円、純利益同10.7%減の37億5千万円を見込む。関西地区で大型案件がやや減少傾向を示していることもあり、今期は中小規模物件を確実に取り込むことに主眼を置く(営業開発部長・稲川健氏)との方針で臨んでいる。

新晃工業は中央熱源方式(セントラル方式)空調システム向けにエアハンドリングユニット(AHU)、ファンコイルユニット(FCU)など二次側トップランナーとして幅広い空調機器を供給する。一般に中央熱源方式はリニューアル時、別方式への変更に伴う工事の負担が発生せず、全体としてコスト面での優位性を持つとされる。また、熱源や二次側・補器類などユニット単位でのパーソナルアップが図りやすいのも特徴とされる。設備設計者の意向するところが可能になる点も発注者にとっては大きな利点。新晃工業は、そうした同方式の良さを最大限に生かす空調機分野で最前線を走り、建築物の目的に応じた多彩な空調システムに対応している。

この10年は同社にとって省エネ、環境性能といった市場からの要請に応え、新製品、新技術開発の成果を発信し続けた期間。製品軸ではヒートポンプ空調機「ヒーボンシスパック」、ダブルブラグファン搭載空調機など特徴的な製品が名を連ねる。さらに40年にレンジを広げると、市場構造の変化に対応し、国内外の拠点整備や二次側機器の新たな開発に乗り出した転換期からこんにちに至る一連の流れが見て取れる。新晃工業の創業は1938年。藤井徳義氏が「新興工業株式会社」を設立、暖房機器の輸入販売をスタートさせたのが起点だ。第二次大戦をはさんで現在の新晃工業を設立したのが1950年。ほどなく熱交換器やファンなど要素製品の開発に着手、並行して国内各地域への営業展開に本腰を入れ始めたのもこのころだった。

二次側トップランナーとしてこれまで同社はコンパクト型空調機AJE C型、節電型空調機ブラグファンシリーズ、ブラグファンの進化形であるダブルブラグファン空調機、1台の空調機に2台のファンモータを搭載したリリーフエアAHU、フリークーリングと冷媒自然循環を組み合わせたハイブリッドエアハン、OAフロアを利用した床吹出し空調システム、清浄空間のニーズに応えるクリーンルームシステム、クリーン環境を実現するエアワッシュ組込空調システム、クリーン加湿器組込外気処理機「クリンキューブ」、クリンキューブの抗菌銅「Cu+」仕様となるクリンキューブCu+など多彩な製品を世に送り出してきた。ビルの耐用年数50年から60年の間に空調設備は2回〜3回の更新を繰り返す。同社は数多い市中ストックに対して65年の長きにわたる歴史の中で培った開発力と提案力で快適空間の創造に貢献する。